受け継ぐ伝統と新たな文化の創造

奈良県道徳教育振興会議委員
株式会社墨運堂代表取締役社長　松井　茂浩

遺跡から出土した木簡や土器に書かれた墨の文字を見たことはありますか。千年以上昔に書かれた文字であるにもかかわらず、今でもはっきりと判読することができます。このことは、墨がいかに優れた発明品であるかを証明しています。

墨が我が国で、それも、奈良の地でつくられるようになってからおおよそ1300年になります。そして、今もなお、墨づくりは奈良を代表する伝統産業の一つであり、我が国の墨の生産量の90パーセント以上が奈良でつくられています。

墨は煤（すす）と膠（にかわ）を練り合わせ、香料を加えてつくります。濃淡やカスレ、ニジミをうまく使うことにより、本来の文字を書くだけでなく、書き手の情感を表現するのに最適の道具でもあり、実に多彩な色を表現します。この特徴を利用して「水墨画」が生まれました。この幽玄な墨色は、日本の気候風土、日本人の気質に合っているのかも知れません。

墨は、明治時代初期まで唯一の筆記用具、筆、紙、硯（すずり）とともに文房四宝の一つとして、日本の文化、芸術の発展に貢献し、歴史を記録してきました。戦後は、固形墨だけではなく、すぐに使えるものとして「練墨」や「墨液」といった液体墨の研究開発が続けられ、書道教育や書画芸術の発展に貢献してきました。古来の伝統技術の上に、多くの先人たちの知恵と努力によって技術革新が行われ、時代の波にもまれながら栄枯盛衰を繰り返し、現在に引き継がれているのです。

そのような墨づくりに携わる者として、他の筆記用具には無い感情表現ができる墨を広く一般の人に使っていただきたいという願いをもち、伝統産業の火を燃やし続けるにはどうすればよいのかを日夜考え続けています。そして最近、私たちの会社では、従来の墨をベースに現代にマッチした絵画用「絵墨」を開発しました。濃いときは黒、薄めると渋い感じの赤・茶・青・黄・緑・紫系の発色をする墨です。伝統を大切にしながら、今の時代に合った新しい墨への更なる一歩であると考えています。

北宋の文豪蘇軾（そしょく）の言葉に「非人磨墨、墨磨人」というのがあります。人が墨を磨くのではなく、墨が人を磨くという意味です。墨は百丁百様、人も百人百様の生き方があります。現代に生きる私たちの役割は、受け継いだ伝統技術を基礎に、絶えず時代に合わせ進化させながら私たちなりの新しい文化を創造し続け、更に次代へと引き継ぐことにあると考えます。

私たちは、いわば伝統文化を後世に伝える中間ランナーと言えるのではないでしょうか。中間ランナーとしての責務をしっかりと考え、今後も、精一杯、努力していきたいと考えています。